

浮城

三三三三三三三三

第一編

第一回 ア、ラ怪しの人の舉動

千早振る神無月も最早跡二日の餘波となつた廿八日の午後三時頃に神田見附の内より塗渡る蟻散る蜘蛛の子どうよ／＼ぞよ／＼湧出でゝ来るのは孰れも鬨を氣にし給ふ方々。まかし熟々見て篤と點檢すると是れにも種々種類のゐるもので。まづ髭から書立てれば口髭類髯鬚の鬚暴に興起した拿破崙髭に狎の口めいた比斯馬克髭。そのほか矮鶏髭。貉髭。ありやなしやの幻の髭と濃くも淡くもいろ／＼に生分る髭に續いて差ひのゐるのには服飾白木屋仕込みの黒物づくめには佛蘭西皮の靴の配偶はありうち。之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ是れより降つては背皺よると枕詞の付く「スコッチ」の背廣にゴリ／＼するほどの牛の毛皮靴。そこで踵にお飾を絶えぬ所から泥に尾を曳く龜甲洋袴。いづれも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌

付。デも持主は得意なもので髭のり服あり我また奚をか覓めんと濟した顔色で火をくれた木頭と反身つてお歸り遊ばすイヤお羨しいことだ其後より續いて出てお出でなさるは孰れも胡麻鹽餅弓と曲げても張の弱い腰に無残や空辨當を振垂げてヨタ／＼のものでお歸りなさるさては老朽しても流石はまだ職に堪へるものかしかし日本服でも勤められるお手輕なお身の上さりとばかりまたお氣の毒な途上人影の稀れに成つた頃同じ見附の内より兩人の少年が話しながら出て參つた一人は年齢二十二三の男顔色は芥味七分に十氣三分どうも直敷ないが秀た眉に儼然とした眼附でズーと押徹つた鼻筋唯惜哉口元が些と尋常でないばかり。しかし締はよささうゆゑ繪草紙屋の前に立つてもバックリ開くなどといふ氣遣ひは有るまいか兎に角願が尖つて頬骨が露れ非道く癩れてゐる故か顔の造作がどげ／＼してゐて愛嬌氣といつたら微塵もなし醜くはないが何處ともなくケンがある背はス